令和4年度 第3回大東市産業振興市民会議（報告）

1. 日時・場所 令和4年10月4日（火）午後3時～5時

市民会館3階中会議室

2. 出欠（敬称略）

【出席】

大阪産業大学 社会連携・研究推進センター長 工学部電子情報通信工学科 教授	草場 光博
大阪公立大学 商学部 教授	本多 哲夫
(株)山田製作所 代表取締役	山田 茂
明星シンセティック(株) 代表取締役	上田 隆章
新大阪食品産業(株) 代表取締役	北尻 正太
NPO法人住まいみまもりたい 理事長	吉村 悦子
NPO法人大東夢づくりコミュニティ 代表理事	中村 朋子
小金屋食品(株) 代表取締役	吉田 恵美子
アッセンブル産業(株) 代表取締役	竹原 清司
大東商工会議所 常議員 (株)ウチダ 代表取締役	内田 祥嗣
近畿経済産業局 総務企画部 中小企業政策調査課長	濱崎 浩

市 産業・文化部長 北田 哲也

事務局 産業経済室 中村総括次長・松本課長補佐・林上席主査・岡崎（文責）

【欠席】

大東市商業連合会 会長 J I L L S

角谷 昌寛

3. 会長あいさつ

製造業においては、材料高や資材・エネルギーの高騰が要因で厳しい状況下にある。

我々は材料に関しては価格転嫁を行えているが、材料にまつわる資材やエネルギーまでは価格転嫁を行えていない。また、10月に入り最低賃金が上がった。自ら意識できる企業になっていかねばならない。その他、大阪産業大学から合同企業説明会に学生が全く集まっていないと連絡があった。人材確保の困難さを目の当たりにしている。だからこそ、大東市の10年後の産業振興ビジョンについての意見交換を皆様と行いたい。

4. 議案

(1) 事務局より説明

事務局より資料1～資料5について説明。本日の会議ではおおもとのビジョンを決めることを目標としたい。

(2) 施策検討（各委員からの意見）

【10年後の未来について】

- ・外で成功しているものを大東に持ち込んでも同じようにはいかない。
- ・地域ごとに地域愛が生まれている。その総体として大東全体が盛り上がるというイメージ。
- ・特徴を持っている強い企業が点在している印象。企業の個性を伸ばすようなもののほうが良い。
- ・大東市の特徴として女性にパワーがあると考える。
- ・住工が共存し、様々な商売を行っている者が繋がり合い、大東市だけで全て完結するような団結力を持った、皆で楽しく住めるようなまちづくり
- ・住んでいる人のアンケート回答の悪い所はない、不満はないということビジョンに盛り込むことができればよい。
- ・市民は盛り上がって非常に良いとなるが、市外の人から見ると大東を選択する決め手に欠ける。
- ・市外から人が来た時にどこに連れて行けばよいか分からない。
- ・ものすごく社会のあり方が変わってきている。今までは管理職の背中を見てついてこいという時代であったが、今の管理職の役割は働きやすいように職場環境を整えてあげるだけであり、そのことにいつ気付くかだけだと思う。
- ・大東市に住んでいる人が弊社を知っており、就職させてほしいと来てくれることが一番望ましい。
- ・人材不足は大東市だけの問題ではなく各地域の問題だからこそオープンファクトリーでは自分の工場を見せて地域で盛り上がりを見せようということになっている。
- ・若者から高齢者、女性、障害者を含めて、多様な人、が大東市の産業振興のビジョンのキーワードに入りたい。
- ・小さくても気概がある個性的な企業、人、のイメージ。
- ・全国に先駆けて大東市で行っている「大東市未来人材奨学金補助制度」はすごいことであり、この補助金を活用して学生を集めることも一つの魅力だと思う。
- ・大東市は人を大事にしている。温かみがあってそこに行けば自分のやりたいことや居場所が見つけられるとなれば、大東市に住みたくなり、さらなる市の発展につながる。
- ・オープンファクトリーの際に企業秘密を少し出す、+αのプレミア感、大東市民最優先で見せることで集まる。
- ・オープンファクトリーの本当の目的は20年先の壮大な未来を見据えた求人活動。
- ・求人、雇用、採用、社員教育を経営者は意識せねばならず、これをパッチワークで行ってはいけない。
- ・若い方は効率性を求めており、料理をつくることを面倒がって完全栄養食を食べたり、情報量が多すぎることからTikTokやYouTubeも倍速で見たりしている。
- ・学生がアルバイトをすることで企業の雰囲気かわかれば就職につながるかもしれない。
- ・働く人も住む人もキラリと個性が輝くまち大東～産学官連携を推進し働きがいも経済成長も～
- ・輝く系の言葉は惹かれるので入りたい。若い世代の責任離れも感じているが、高校一年生で起業するためにはどうしたらよいかを話している方もいる。今の若い世代よりもっと下の世代は異なる価値観かもしれない、その世代に目を向けるのはありかもしれない。